

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第17回

秋の野の花



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(17) 秋の野の花

秋に野を彩るハギやタデの仲間については、第6回と第8回のコラムに載せております。今回は、それら以外の秋の野の花について述べることにします。しかし、秋はとくに花の多い季節です。したがって、みずき野周辺に見られる美しい植物や話題性のある植物をいくつかピックアップして紹介します。

(1) クズ

クズはマメ科の多年草。日本または東アジアから北米やヨーロッパに移入されたクズ（英語では **kudzu**、カズ）が猛威を振り、森林の樹木を覆って枯らしてしまうという被害をもたらし、国際自然保護連合（IUCN）により、「世界の侵略的外来種ワースト100」の一つに選ばれました。クズが日本国内よりも帰化地で猛烈に繁殖する原因の一つは、その生育を妨げる病原微生物やクズを食害する昆虫がないことです。

日本では、クズにも外敵が多く、繁殖力がかなり抑えられるせいか、さほど憎まれることもなく、むしろ古代より親しまれ、山上憶良により秋の七草の一つにも選ばれました。しかし、クズの花自体を詠んだ歌は少なく、葉が風に吹かれて見せる白い葉裏の様子から、「恨み」の表現に使われたりしています。

新古今和歌集には、赤染衛門（女流歌人）から、親友の和泉式部に、彼女の浮気を心配して送った歌があります。

和泉式部、道貞（最初の夫、橘道貞）に忘れられてのちほ
どなく敦道親王通ふと聞いてつかはしける

うつらはで しばし信太（しのだ）の 杜（もり）を見よ
返りもぞする 葛の裏風

赤染衛門（新古今和歌集 1820）

（心うつりしないで、しばらくは信太の杜を見てなさい。
葛の葉 [=和泉式部] を吹き返す風 [=道貞] が戻ってくるかもしれないよ）

和泉式部の返歌

秋風は すごく吹けども 葛の葉の
恨みがほには 見えじとぞ思ふ

和泉式部（新古今和歌集 1821）

（秋風 [=飽き風] は冷たく吹いてくるけど、恨んでいる様子には見られまいと思うわ）

信太の杜（大阪府和泉市）は葛の原で著名な歌枕。和泉式部の名は夫道貞の任地、和泉に由来します。信太の杜は陰陽師安倍晴明の母親とされる白狐「葛の葉」が住んでいた場所と伝えられています。



クズの花
9月中旬
文化財公園



クズの葉
9月下旬
文化財公園
風が吹くと葉が
翻って、白い葉
裏を見せます。

(2) オオバコ

オオバコといえば、道ばたに生える見栄えのしない雑草（多年生）と見られがちですが、花をつけた穂に目を寄せると、その花の意外な美しさに気がきます。花は夏から秋にかけて咲いていますが、秋の方がとりわけ美しくみえます。穂の上の花はごく小さく、がくが花を包み、花びらは貧弱でほとんど目立ちませんが、突き出した雄しべの葯が薄紫で美しいのです。中には白い雄しべをもつ個体も見られます。



群生するオオバコ
9月中旬
本町地区

オオバコの種子は水に濡れると粘り気が出て、通行人のわらじや靴の裏にくっつきます。そしてどこか、道の途中で地面に落ちます。リンネはオオバコの属名を **Plantago** と命名しました。これは「足の裏」と「運ぶ」の合成語です。リンネはオオバコの智慧を見抜いていたということです。古来より旅人は長い道のりにオオバコという足跡を残してきたはずです。芭蕉も各地に名句を残してきたのみならず、知らず知らずのうちにオオバコを東西南北に広げてきたことでしょう。

オオバコの花
9月中旬
本町地区



(3) キツネノマゴ

目立たない植物ですが、道ばた、とくに林や藪のへりに生える、せいぜい20～30センチの小さな1年草です。みずき野周辺でもごく普通に見つけることができます。子ギツネの尻尾のような穂から唇(くちびる)状の薄紫の花が咲いているので、すぐ分かります。キツネノマゴとは、一度耳にしたら忘れられない名です。西南諸島にはキツネノマゴの変種で、キツネノヒマゴが分布しています。



キツネノマゴ
10月下旬
本町地区

(4) アキノタムラソウとヤマハッカ

アキノタムラソウもヤマハッカもともにシソ科の植物で、美しい花をつけます。名前はアキノタムラソウですが、真夏から咲いており、晩秋まで花を見ることができます。両種ともみずき野周辺の木陰や道ばたによく見かける植物です。



アキノタムラソウ 9月中旬 文化財公園



ヤマハッカ 9月下旬 貝塚地区

(5) 秋のキク科植物

キク科植物では、一見一つの花に見えるものは、たくさんの花（舌状花・筒状花）が集まったもので、頭花とよびます。頭花、舌状花、筒状花の説明は、本コラムの第3回に載せておりますので参照してください。

日当りのよい野原や農道のへりには、アキノノゲシが咲いています。その頭花はタンポポと同様、すべて舌状花で、白ないしクリーム色。秋空によく映える花です。



アキノノゲシ
9月下旬
本町地区

ヨメナも日当りのよい場所によく見かけます。野菊の仲間で、頭花の舌状花は薄紫、中央に位置する筒状花は黄色です。分類学では、関東地方や東北地方のヨメナはカントウヨメナ、中部以西のヨメナを単にヨメナとしています。したがって、みずき野周辺のヨメナはカントウヨメナです。カントウヨメナとヨメナはよく似ていますが染色体の数や果実の大きさによって区別されます。



ヨメナ（カントウヨメナ） 10月中旬 本町地区

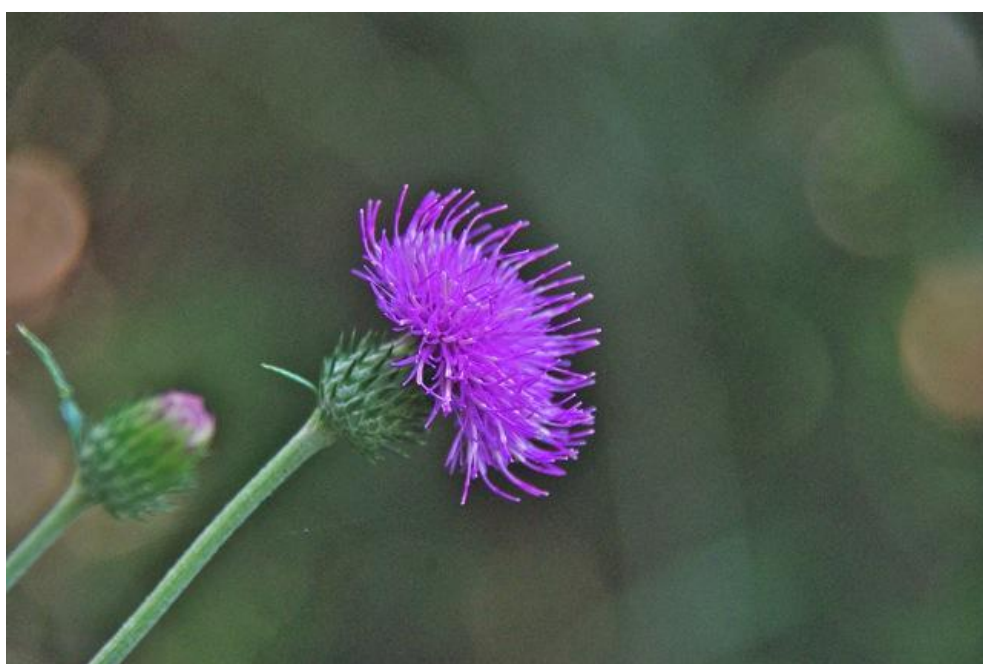
守谷には、ノコンギクやユウガギクなどの野菊もあるはずですが、みずき野周辺では見ておりません。

アザミはキク科植物のなかでも目立って美しい花を咲かせます。その美しい花を護るためでしょうか、葉にはするどいとげがあります。茨城県南で秋に普通に見られるアザミはトネアザミとノハラアザミで両種とも多年草です。しかし、みずき野周辺には、これらのアザミはあまり多くないようです。私自身は両種とも貝塚地区でしか見たことがありません。



トネアザミ 9月下旬 貝塚地区

トネアザミはトネ（利根）と名のつく通り、関東地方に多いアザミです。別名はタイアザミ。高さ1～2メートルで、たくさんの頭花がうっついて咲きます。ノハラアザミは高さ1メートル以下で、初夏に咲くノアザミに似て、いかにもアザミという名にふさわしい、美しい花をつけます。



ノハラアザミ
10月中旬
貝塚地区

コスモスは栽培種ですが、近年は野生化して、自生しているらしい個体をよく見ます。

荒れ地に自生しているように見えるコスモスの風景を写真にしてみました。いろいろな色の花が一面に咲いているので、人為的に種子が播かれたのかもしれませんが、いかにも秋を感じさせる風景です。バックのセイタカアワダチソウ（キク科）の黄色によく調和しています。



コスモス
10月中旬
本町地区

(6) ヤマトリカブト

トリカブトの仲間は日本に35種以上あるようですが、中部以北の平地や低山に多いのはヤマトリカブトです。みずき野周辺では限られた場所で見られます。



ヤマトリカブト
10月上旬
貝塚地区

トリカブトの仲間は、ヤマトリカブトを含め、猛毒物質（アコニチンなど）を含んでおり、非常に危険な植物であることは、古代より世界各地で知られ、恐れられています。しかし、トリカブトの花は、その名のとおり、舞楽に使われる鳥兜に似ており、その不思議なかたちは、濃厚な紫色に彩られ、妖しい美しさをかもし出します。トリカブトの一種、ハナトリカブトは観賞用に栽培されています。

(7) ツユクサ

ツユクサはみずき野にもその周辺にはごく普通の1年草ですが、可憐で美しい花には誰もが親しみをもっていることでしょう。



ツユクサ
9月中旬
3丁目

花色が変異した
ツユクサもたま
に見つかりま
す。

左：9月下旬
本町地区

右：10月中旬
本町地区



徳富健次郎（蘆花）は作品「みみずのたはごと」の中で、ツユクサを讃えて、次のように書いています。



「・・・草姿（そうし）は見るに足らず、唯、唯二弁より成る花は、全き花と云ふよりも、いたずら子に撈（おし）られたあまりの花の断片か、小さな小さな碧色の蝶の唯かりそめに草にとまったかとも思はれる。寿命も短くて、本当に露の間である。然も金粉を浮べた花蕊（かずい）の黄色に映発（えいはつ）して惜気もなく咲き出でた花の透き徹る様な鮮やかな純碧色は、何ものも比ぶべきものがないと思ふまで美しい。つゆ草を花と思ふのは誤りである。花では無い。あれは色に出た露の精である・・・」



ツユクサは古代から愛でられた花で、万葉集やその後の歌集にもしばしば詠み込まれています。ツユクサは古代には月草（つきくさ）とよばれていました。



月草の うつろい易く 思へかも

わが念（も）ふ人の 言（こと）も告げ来（こ）ぬ

大伴坂上大嬢（万葉集 583）

ツユクサは美しくとも短命であることになぞらえて、恋人のつれなさを表現しています。

西脇順三郎の詩集「旅人かへらず」より、

女の笑ふ寝顔
露草の色
万葉人の寂しき



私自身、ツユクサの花を見ることを目的に、秋の野を散策することがあります。

2015年10月
本吉 總男